

琉球大学学術リポジトリ

戦後沖縄における異文化接触　－ひとつの試論－

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学アメリカ研究センター 公開日: 2012-06-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山里, 勝己, Yamazato, Katsunori メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/24684

戦後沖縄における異文化接触

—ひとつの試論—

山 里 勝 己

センター長・法文学部教授

はじめに

なぜ異文化接触か？

1945年以降の沖縄でアメリカ研究を志した者であれば、それぞれの細分化された専門分野から越境しつつ、学際的にアメリカを理解しようとする衝動を抑えることはむづかしい。なぜなら、アメリカの圧倒的な存在と、その存在ゆえに生じた文化の混交は日常的に目撃されてきたものであるからだ。さらには、目撃する者自体がそのような文化を生きざるをえない状況があり、衣食住という基本的な要素がすでにアメリカ文化との接触、混交を経て存在する。そのような生活を避けようと思えば、沖縄から逃亡することよりほかに道はないのであるが、多くの者にはそれは不可能なことである。また、沖縄の音楽や演劇のような大衆文化、さらには「純」文学というハイカルチャーやそれを支える沖縄の思想にもアメリカはその巨大な影を落とし、文化の接触から生ずる様々な人間模様の表象が、戦後の沖縄文化を独特の色合いに染め上げてきた。

単純に言えば、そこにアメリカがいるから、という理由だけで研究が始まることもある。しかし、すこし考えてみれば、沖縄に住む人間にとっては、アメリカとの異文化接触の態様やメカニズムを知ることなしに、自らのアイデンティティの来歴を語ることはできないということが理解されるだろう。アメリカ文化との接触が始まってすでに半世紀余、いまなお進行する沖縄における文化変容はより広範囲で深みのある分析や説明を要求する段階にきている。時間や資料も研究という営為十分に耐え得るだけの蓄積がある。なによりも、「アメリカ」は、否応なしに、沖縄に生きる個人の全存在に関連する事柄になっているのである。

異文化接触とはなにか

「接触」という言葉は誤解を生みやすい。この言葉から、表面的に文化の諸要素がすり合わせられる状態を想像することもできる。あるいは、研究者が異文化接触という言葉を用い、「文化」に傾斜した分析をおこなうこと自体が、軍事基地の存在を隠蔽し、政治的な葛藤に満ちたこの現実を覆い隠す役目を果たしているとも考えることも可能であろう。皮相な研究のありようを想定すれば、それは否定できないことである。

しかし、ここでいう「接触」とは、ただ単に「出会う」というレベルの記述を指しているのではなく、異なる文化が混交・衝突する中で生起するさまざまなプロセスに見られる混乱や創造をその枠組みとして想定しているのである。世界のあらゆる場所で異文化が出会い、絡み合い、衝突し、極端な場合には

暴力による支配・被支配の関係を構築してきた。植民地主義、奴隷制、そして今日のアジアやアフリカやカリブ海文化圏に見られるような、文化の混交や混乱は文化の「出会い」から生み出されてきたものなのである。これは破壊的な行為をとまなう「出会い」でもあるが、同時に一方ではこれが創造的なプロセスをとまなうものであることも否定できない。文化は果てしなく自己創造と変容をくりかえしていく。いつまでも「本質」を保つ文化が存在しないことはすでに常識である。たとえば、『戦後沖縄とアメリカ - 異文化接触の五〇年』（沖縄タイムス社、1995年）は、1945年から1995年までの、沖縄における異文化接触のさまざまな様相を記述しようと試みたものであるが、本書に収録された多くの論文が沖縄文化の変容に言及し、「接触」という言葉が想定し視認しようとする混交の複雑さや広がり、そしてその深みを具体的に分析している。

帝国のまなざし？

異なる文化が接触することは普遍的な現象である。ひとりの旅人は、見知らぬ土地を訪れ、そこで自らと異なる生き方をする集団と遭遇する。生き方の総体を「文化」と呼ぶとすれば、出会いの瞬間からすでに相互に他者を分析・比較し、文化を混交しようとする衝動がわき起こる。極端な場合には暴力を用いて集団的にその社会や文化を支配し、歴史の書き換えが行われる。コロンブス以降の世界史に限ってみても、歴史の中で目撃されてきた多くの「出会い」が、このような破壊的な行為をとまなっていたはずである。そこには、メアリー・プラット (Mary Louise Pratt) が *Imperial Eyes: Travel Writing and Transculturation* (Routledge, 1992) で指摘するように、「帝国のまなざし」があり、「コンタクト・ゾーン」(contact zone)における支配・非支配の関係を基礎にした文化遭遇の多様なプロセスが展開されることになる。

琉球諸島という狭い地域においては、1945年から1972年までの27年間、社会のあらゆる領域において、ヨーロッパ系白人を中心として形成されたアメリカ文化との濃密な接触があり、そのような文化接触に伴うさまざまな現象が生じた。これは、その濃密さにおいて、きわめて希有な事例であった。そして、このような文化の接触がもたらした生成運動はもはや停止することはなく、その運動エネルギーはいまでもあらゆる領域に浸透しつつ文化や社会を生成していくように見える。アメリカとの接触にとまなう文化の変容あるいは生成は、アメリカ統治が終わった1972年で終焉したのではなく、いまなお生起しているものなのである。沖縄で異文化接触を研究することの意義は、このような運動にとまなう多様なプロセスを記述し、説明することにある。そして、このような濃密な接触を観察する中において、普遍的な異文化接触のメカニズムを解明することにある。

プラットの「コンタクト・ゾーン」の概念は、主として17世紀以降のヨーロッパの帝国主義的な展開にとまなう文化接触に基礎をおくものである。それでは、戦後沖縄における文化接触はどのように理解すれば良いのであろうか。戦後沖縄において、「コンタクト・ゾーン」のような、あからさまな「帝国のまなざし」を有する文化の侵入があったかと言えば、これについては、いまだ結論をみていないと言うのが妥当なところであろう。「パターナリズム」、あるいは「新植民地主義」などの用語が使われたことはあるが、1972年以降において、アメリカ統治の27年間をきっちりと説明することはいまだなしえて

いないように思われる。

戦後沖縄の27年間において、古典的な植民地的文化遭遇があったか、と問われれば、ただちにそうだと答えることは簡単なことではない。あるいは、そのようなことが目撃されたこともあると答え、さまざまな事例を挙げることはできるだろう。基本的人権が制限されたり、軍政府の強権による民主主義的なプロセスが歪められたりしたこともある。強制ときわめて不平等な状態が存在したことも確かなことである。しかし、あらゆる領域において古典的な植民地的支配・被支配の関係が浸透し、社会を呪縛していたと断言することも容易なことではない。これは、いまだに結論が得られていない重要な論点である。

文化変容 (Transculturation)

現代沖縄において、いまなお文化の接触と葛藤 (contact and conflict)、影響と合流 (influence and confluence)、融合と混乱 (fusion and confusion) が続いていることは誰の目にも明らかであろう。アメリカとの文化接触の研究において、支配・被支配の関係だけを想定し、そこに焦点を絞ることは複雑な文化接触のプロセスと人間のリアリスティックな生活の衝動を隠蔽する。つまり、日常生活のレベルでは、われわれは「文化変容」を生きているのである。これは、民族学では、異文化との接触にともなう新たな総合的な文化の創造を意味する用語である。この用語は、「コンタクト・ゾーン」においては、被支配文化は支配的な文化のもたらす材料をどのように選択し受容するのか、あるいはなにを拒否するのかという文脈で使われる言葉である。プラットが指摘するように、植民地はメトロポリスから流入する文化を取捨選択しながら新たな文化を創造していった。同時に、ヨーロッパでは、植民地からもたらされた「果実」がその社会に浸透し、社会や文化や歴史だけでなく、ヨーロッパ人という主体自体が植民地という周縁の力やそこに生きる他者の存在によって形成されたのである。この点で言えば、異なる文化が接触するさいには、支配・被支配だけの単純な二項対立の構造はあり得ない。

それでは、戦後沖縄における「文化変容」とはいかなるものであったか？沖縄の人間は何を選択し、何を拒否したのか。その結果、どのような文化が新たに創造されたのか。アメリカが沖縄から得た「果実」とは何であったか？それは古典的な「コンタクト・ゾーン」に見られるような双方向のプロセスであり得たのか？あるいは、沖縄は、太平洋の果てるところにある貧しい岩だらけの島であり、The Rockと呼ばれるサンフランシスコ湾に浮かぶ（かつて連邦刑務所として使用された）アルカトラズ島のように、アメリカ人を閉じ込めるだけのものでしかなかったのか、それも軍事目的だけのために。（戦後初期、沖縄にやってきたアメリカ人たちが沖縄をThe Rockと呼んだことは周知のことである）。

沖縄史上初の大学である琉球大学の誕生は、戦後沖縄社会と文化の変容に甚大な影響をあたえたものであった。周知のように、その設立は米軍政府の手によるものである。そして、その誕生にいたる経緯と成長のプロセスは、異文化接触という現象をあざやかに説明する。琉球大学設立の経緯と、過去50年余における大学の沖縄社会に対する貢献を考えると、大学創立当時の為政者の政治的思惑を越えて、異文化接触の「果実」を享受したのはじつは沖縄側ではなかったのか、アメリカ側から否応なしに流入する文化が沖縄社会や文化に浸透しようとしたが、それを巧妙に取捨選択しつつ自らの主体を確立していっ

たのはじつは沖縄側であった、という見方も成立する。アメリカという他者を見つめる沖縄側のまなざしは鋭い逆照射を浴びたが、逆に言えば、沖縄人にとっては、他者としての自己を見つめ直す中で主体を確立するというプロセスがそこに成立したのである。この点で言えば、沖縄におけるクロスカルチュラルリティ (cross-culturality) - 異文化接触により生じた文化のすがた - の解明は、アメリカ文化が強力な推進力となっている地球化と、そのようなプロセスにおいて展開される異文化接触の理解に関して、有益な示唆を与えるものとなるであろう。

文化接触は、双方向的なものである。「文化変容」という概念自体に、「被支配」文化の能動的な選択、「支配」的な文化との接触から文化を再創造し、総合化する (ハイブリッドなものにしていく) 行為がすでに想定されている。だから、最終的には、アメリカ側の変容もじつは検討されなければならないはずである。沖縄における異文化接触の研究は、沖縄側の「文化変容」だけを前景化するものであってはならない。アメリカは、沖縄において、沖縄を文明化するという使命を自らに課した。これはアメリカ的デモクラシーの浸透を意味した。支配的な文化がこのような使命を自らに課すこと、あるいはそのような「使命」を支配の口実とすることは、古典的な「コンタクト・ゾーン」でよく見られることであった。そして、その際に文明化の使命を帯びた文化が犯した誤りは、それが接触し、文明化されることになっている文化の有する力に盲目になるということであった。

安定した統治 (支配?) のために、アメリカの民主主義は周縁文化 = 沖縄文化とどのような遭遇の仕方を選択したか? 沖縄文化に対してどのような性格付けがなされたか? 沖縄側の反応に対してアメリカの民主主義文化はどのような動きを見せたか? これはきわめて興味深いことであり、そのような事例を見つけることはそうむづかしいことではないのかも知れない。しかし、このような双方向性が果たして研究に値するスケールで生じたのかどうか。これはアメリカ側の研究者との共同研究による解明を待たなければならないものであろう。

異文化接触とは、このように複雑きわまりないものであり、研究が目指すところは、このプロセスを詳細に観察しつつ、できうる限り明晰に記録し記述することにある。そのためには、学際的、複合的なアプローチが必要であり、研究者にはそれぞれの研究分野を大胆に越境しつつ、柔軟で総合的な視野をもつことが要請されることになる。

異文化接触の生態学

戦後沖縄における異文化が遭遇するプロセスをどのように理解し、そのメカニズムをどのように説明すれば良いのであろうか。以下は、ひとつの試論である。

*

アメリカ現代詩の重鎮でピューリツァー賞やボリンゲン賞を受賞したゲーリー・スナイダー (1930-)

は、京都で10年近く日本文化を学び仏教を研究した詩人であるが、その文化観は異文化接触について興味深い視点を提供する。スナイダーは次のように述べている。

生きているあらゆる文化と言語はかぞえきれないほどの他家受精の結果として存在しているのであり、文明が「興廃」した結果ではない。文化や言語は、むしろ植物が養分を吸収し、周期的に開花し、実ができ、それが破裂し種をまき散らした結果として存在するようになったのである。

スナイダーの指摘をまつまでもなく、文化は固定された「純粋」なものではなく、接触し合い、融合を重ねて終わりのない自己生成を続ける。そして、文化は境界を自由に越えていく。逆説的な言い方になるが、ひとつの文化は抑圧することが不可能な、野性的で、「ワイルド」なエネルギーをもって異なる文化と接触し、融合を重ねていく。それからさまざまな混乱と混交を経た後で花開き、実がはじけて文化の種が拡散する。スナイダーの上記の文章に触発されたこのような文化観を、まずは「異文化接触の生態学」とでも言うておこう。このような視点から見ると、文化が生成される環境とは、無数の要素が相互依存するネットワークであり、排他的な境界が存在しない、開放されたスペースである。これは、混じりつけのない純粋な文化が存在するという神話（文化的エッセンシャルイズム）を解体するエネルギーを秘めた考え方でもある。

戦後沖縄では、基地の金網、いわゆる「フェンス」は一種の国境であり、そこから異文化がすり抜けてやってきた。たとえば、沖縄島という狭い島嶼的な場所に、大陸的な文化環境、すなわちヨーロッパ、アジア、北米や南米、そしてアフリカに見られるように、国境を隔てて異文化が存在し、人為的に線引きされた国境（「フェンス」）というラインをやすやすとすり抜けて日常的に文化が接触する場が誕生したのである。特に、衣食住は、どのような力にも押しとどめられることなく、開放された混交の環境を形成した。沖縄とアメリカ双方の文化は、接触を重ね、深く絡まり合い、いまわれわれが目撃するハイブリッドな戦後沖縄の文化が創造されてきた。たとえば、戦後初期には、圧倒的な力をもつアメリカ文化から流入する部分が大きかったとしても、1972年以降は微妙な変化が接触の態様にみられるようになっていく。

戦後50年余、沖縄社会のあらゆる分野でアメリカ文化との接触が行われてきた。それはいまなお日常的に継続される現象であり、その全容を見極めることは容易なことではない。しかし、異文化を見つめ、そのような文化との接触のありようを研究することは継続されなければならない。ひとつには、なによりも異文化間の対話を続けるために。そして、究極的には、異文化に対する洞察を深め、異文化間のよりよい理解のありようを模索するために。

しかし、われわれは他者へと向う眼差しは、同時に鋭い逆照射を浴びるものであることをも理解しなければならない。すなわち、他者を見つめることは、同時に我々自身が見つめられ、そのまなざしの中でわれわれは自分が誰であるかを知ることになる。（ちなみに、沖縄で初の芥川賞を受賞した大城立裕の「カクテル・パーティー」は、このようなプロセスを主題として有する戦後沖縄を代表する小説であ

る)。戦後沖縄における異文化接触の中で、沖縄人が獲得したことの最も顕著なもののひとつは、アイデンティティに対する鋭い感覚であったといってもいいだろう。日々の生活の中で、他者と自己との対話を続けながら、異文化と向かい合いつつ、沖縄の人間はある種の国際性、開放性を獲得したのかもしれない。(これも「カクテル・パーティー」の主題のひとつである)。

また、戦争も、占領も、そして移民も激しい異文化接触であるということを、沖縄の人間は戦後体験として学んだ。たとえば、沖縄戦のさなかに日米双方がばらまいたプロパガンダ・ビラは、比較文化の貴重な資料でもある(『新沖縄県史』資料編)。アメリカによる沖縄占領と統治は、軍事的な強権による基本的人権の制限をとともなうものでもあった。沖縄の「祖国」復帰運動は、だから、日本国憲法の保障する諸権利の獲得をめざす公民権運動の側面を有するものでもあった。アメリカは、戦後において、本国とその軍事統治下にある沖縄で同様の運動を抱えこむことになったのである。また、戦後の移民の歴史から、軍事占領・統治にとともなう政策的な要素を排除することも不可能であろう。

しかし、そのような体験は、未曾有の混乱と葛藤をくぐり抜けてきたあとの21世紀初頭の視点で言えば、それが文化を未来に開く体験であったと言明することは、かならずしも誤りではない。つまり、異文化との接触とそれによってもたらされた「文化変容」は、一面では戦後を生きてきた沖縄人に希望をもたらしたのもであったということの意味する。高等教育の場の創造、島嶼性からの脱却、風土病の根絶、伝統芸能の復活とその新たな全国的・国際的な受容、戦前の軍国主義、全体主義的思想からの解放と批判的な民主主義思想の獲得、沖縄の内と外における差別や不寛容の克服……。そして、異文化接触を体験した戦後沖縄的な生き方が、日本のみならず、文明間の対話になんらかのカタチで貢献すること、このようなプロセスから生成された文化の種が未来に向けて弾け、より多様な文化の間で共有する種子や果実が生成されることはないか――。

このような体験から、新たな未来を想像し、創造していくことを指向するのが「異文化接触の生態学」なのである。

これからの研究 ―― アジア・太平洋地域との関連で

沖縄におけるアメリカ文化との接触に関する研究をより深化するためには、太平洋およびアジアを中心として、同様の体験をした諸国との比較研究がこれから進められるべきであろう。アジア・太平洋地域のフィリピン、ハワイ、グアム、そしてカリブ海のプエルトリコなどが、アメリカ文化との異文化接触による大きな文化変容を体験した社会として挙げられる。

たとえば、これらの地域や国の高等教育機関のありようをみるだけでも、その共通点はすぐに理解できるだろう。すなわち、この地域や国々を代表する大学は、すべてアメリカによって創立されているのである。大学は社会を変革し、文化変容をもたらす強力な武器である。ハワイ大学が、ハワイの王制に対抗する民主主義というイデオロギーを広めることを創立の(隠された)基本理念としていたように、あるいは琉球大学が戦前の日本的全体主義を駆逐する民主主義教育を行うための機関として位置づけられたように、大学の創立は文化と社会を変えていく大きな契機になるのである。

これらの地域における伝統文化はどうなったのであろうか？言語政策はいかなるものであったか？なぜ、沖縄では、アメリカは英語の普及について相当の努力を重ねたにもかかわらず、他の地域とは異なって、高等教育機関や政府機関において英語が母語を駆逐することはなかったのか？なぜ、他の地域では英語が支配的な言語的地位を獲得し、結果として文化変容の様相に大きな違いが生じたのか？

ここに挙げたのは2、3の事例でしかない。沖縄のような狭い地域で生じた異文化接触を記述し分析するだけでも容易な仕事ではない。ましてや、上記の地域や国々における文化接触の様相を研究することは、相当のエネルギーと年月が必要であることは言をまたない。しかし、研究が普遍的なレベルのものであるためには、このような広がりの中で獲得された知見に基礎をおくものでなければならない。

(やまざと・かつのり、アメリカ文学)